

# この子の父をかえして……

## 故福田さん(三煉)の妻玲子さんの手記

資本の保安サボのため、三井金属三池製煉でも一人の労働者が無惨にも殺された。十月七日翌型精溜炉で亜鉛末が爆発、二人の労働者が重傷を負ったが、そのうちの一人は福田勝美さん(優れた活動家だった)は、九日午前十二時四十五分、悲しみの遺族たちがどうしようもなく見守るなかで、全身火傷の残酷な苦しみにもがきながら、息をひきとつていった。ここに、福田さんの妻の玲子さんの怒りの手記を紹介する。



この手記を書いた福田玲子さん(26才)と、ひとつぶだねの千尋ちゃん(2才)

もがき苦しんだ主人だった  
「鉛筆がにぎりたたい」「牛乳がのどに詰る」「ヨークルトを買ってきたくれ」「梨がたべたい。水分があつてほしい」「うん」など、苦しむ息の下からたええええと叫ぶ主人を、私は「早く新聞の記事を書きたい」と早く新聞の記事を書きたい。

## 自分が誕生したその日

## 労働者の勝利信じながら 主人は死んでいきました

もう、その苦しみをやわらげてやるためのどんな手助けもできない。私は、主人の一挙一動に神経を集中して、気も遠くなる心痛をあの肉が焼け、煮えきって、輸血もできないような状態の主人の身体を、手術してやると輸血し、た一本のビニールのくたをたより三三三三、死と、さらにはそれよりもいっそう恐ろしい苦痛とに最後の力をこめて叫びました。

「早く新聞の記事を書きたい」と早く新聞の記事を書きたい。私は、主人の一挙一動に神経を集中して、気も遠くなる心痛をあの肉が焼け、煮えきって、輸血もできないような状態の主人の身体を、手術してやると輸血し、た一本のビニールのくたをたより三三三三、死と、さらにはそれよりもいっそう恐ろしい苦痛とに最後の力をこめて叫びました。

「早く新聞の記事を書きたい」と早く新聞の記事を書きたい。私は、主人の一挙一動に神経を集中して、気も遠くなる心痛をあの肉が焼け、煮えきって、輸血もできないような状態の主人の身体を、手術してやると輸血し、た一本のビニールのくたをたより三三三三、死と、さらにはそれよりもいっそう恐ろしい苦痛とに最後の力をこめて叫びました。



会社は遺族の完全補償をせよ

三煉労働者は、福田さんを保安サボで殺した会社に對し、二十四時間ストライキをうち、抗議した。第一組合もその日、残業拒否をもつて闘った。

## 思いも寄らぬ知らせが……

「ご主人がけがをされました」という連絡に、「しゅん」「ハッ」としたものの、心を静めて病院へかけつけました。目、はな、口の部分だけをきりぬき、頭から足の先までまっ白のほうたいでつづまれ、酸素吸入を受けている主人を見せられたとき私は声をのみ、目を見ひらいて立ちつくしてしまいました。

「お前と結婚してからが一番楽しかった。しあわせだった」という主人に、なきさけんで取りすがりたのを、やっとの思いでふみこたえて「死ぬものですか。絶対助かる。絶対助かります」と、私は主人をほめました。

「お前と結婚してからが一番楽しかった。しあわせだった」という主人に、なきさけんで取りすがりたのを、やっとの思いでふみこたえて「死ぬものですか。絶対助かる。絶対助かります」と、私は主人をほめました。

「お前と結婚してからが一番楽しかった。しあわせだった」という主人に、なきさけんで取りすがりたのを、やっとの思いでふみこたえて「死ぬものですか。絶対助かる。絶対助かります」と、私は主人をほめました。

## 保安会議の現状を どう思いますか

### 職場新聞「地底」から

私達は、会社の行っている保安会議が、真に私達の命を守る保安会議であるかどうか、考える必要があるか、と、三十分とありますが、会社としては三十分と

規定してありますので「意見があれば、保安会議の出席をとった後で個人的に聞きましよう」ということにしてしまひ、全体に反映させてくれません。

規定してありますので「意見があれば、保安会議の出席をとった後で個人的に聞きましよう」ということにしてしまひ、全体に反映させてくれません。

## 自分の誕生日に死が……

九日、三日目の朝だった。「さっ、もう夜明けよ。今日は貴方の「五才の誕生日よ」と私がいうと、「うん、おほえてるよ。でも今日は駄目だから、退院のときいっしょにお祝いしよう」といった主人。

## 何にもかえられぬ人の命

「おかし。この手が動かない。痛い。ああ痛い。はなしてくれ玲子。聞えないか、はなせばかやろう」ときけんた主人。「だめよ。がまんして。手のことは心配しないで」という私に、「それじゃあ、お前がうぐくううにしてくれるか」とむりに笑ってみせた主人。

「おかし。この手が動かない。痛い。ああ痛い。はなしてくれ玲子。聞えないか、はなせばかやろう」ときけんた主人。「だめよ。がまんして。手のことは心配しないで」という私に、「それじゃあ、お前がうぐくううにしてくれるか」とむりに笑ってみせた主人。

「おかし。この手が動かない。痛い。ああ痛い。はなしてくれ玲子。聞えないか、はなせばかやろう」ときけんた主人。「だめよ。がまんして。手のことは心配しないで」という私に、「それじゃあ、お前がうぐくううにしてくれるか」とむりに笑ってみせた主人。